

延岡：二つの城主を持つ城下町

博士後期課程 福田峻

比較的人口稠密にして多くの都市文化の伸長が見られる九州地方にあって、宮崎県北部はその乏しい平地と交通上の制約によりやや発展から取り残されている。この地域へ至る主要な動脈である JR 日豊本線は、隣接する大分県佐伯市からリアス式海岸を避け内陸に分け入り、人煙稀な九州山地を延々と進む。佐伯から特急列車で 1 時間強、小倉からであれば乗り換えを伴い約 3 時間 30 分、ようやく延岡にたどり着く。

かかる困難な条件にも拘わらず、五ヶ瀬川河口の僅かな平地に形成されたこの都市は人口 12 万人を擁し、今日に至るまで発展を遂げている。江戸時代には九州における貴重な譜代大名、延岡藩の藩庁がおかれ、小規模ながら地域の中心としての力を持った。五ヶ瀬川上流の木材が主要な特産物となっており、中央との往来には方財島から海に出たという。明治期に入ると県庁は宮崎市におかれ、城主を失った延岡の地位は低下した。転機となったのは 1923 年の日本窒素肥料(現・チッソ)によるアンモニア工場の設置である。当地が選ばれたのは、五ヶ瀬川の豊富な水を活かした発電と同年に全通した日豊本線の貨物輸送によるところが大きい。この工場は後に独立して旭化成となり、様々な機能が延岡に集中し、下請けを含めた集積が形成された。旭化成が多角化を進める中で延岡の事業所はマザー工場たる性質を持ち、中核的機能を持ち続けた。

延岡駅で列車を降りると目前に見えるのは今山大師・今山八幡宮を擁する山である。8 世紀からこの地に鎮座しているといい、古代に開けた日向の歴史に思いをはせることができる。桮の門前が商店街をなしており、アーケードの切れ目に山へと誘う鳥居が見える。三本の橋の一つで五ヶ瀬川を渡った先が旧来からの中心である。延岡(縣)城は五ヶ瀬川と大瀬川にはさまれた丘陵地の特性を生かして築かれた城であり、城下町は当初城と二本の川に挟まれた地区に形成され、後に二本の川の対岸に市街が拡大した。現在もこのわずかな土地に都市の中核機能が集中している。近年建て替えのなった市役所や金融機関、歴史を今に伝える資料館が集まるほか、労働者たちが利用するのであろうか、飲み屋街も形成されている。

官庁街の方を見やると背後に大きな緑が見える。これが延岡城跡である。千人殺しと呼ばれる巨大な石垣と復元された北大手門が残されているが、天守台には目立った遺構はなく緑に包まれている。城山を登りきると、伸びゆく木々の向こうに果たして、二つの川と工場群を一目のうちに入れることができる。大瀬川右岸の工場から突き出る煙突は独特の景観を生み出している。

尤も、延岡のおかれた現状は明るいものとは言い難い。旭化成の従業者の数は繊維事業の合理化がすすめられた 1960 年から一貫して減少しており、第二の城主にも往時の勢いはない。新産業都市に指定された際には南方の郊外に団地が開発され、以降も人口の郊外流出が進んでいる。一部工場用地のショッピングセンターへの転換も行われた結果商業も郊外化し、2000 年代初頭には中心部の大型店が相次いで閉店した。しかしながら、水と緑と大工場に囲まれた美しい都市の姿に、新たな世代の胎動を期待せずにはいられない。

延岡の位置 Location



延岡城跡からの眺め(筆者撮影) The view from the castle



中心市街地 The central district



地図はマピオン mapion.co.jp のものを加工